

▶▶▶加藤 裕治

「文学的なるもの」の価値

先日、私が勤務する静岡文芸大で、映画監督・川和田恵真さんの講演を聞く機会に恵まれた。「万引き家族」「怪物」で知られる是枝裕和監督らが所属する分福のメンバーで、2022年のデビュー作「マイスマールランド」が、注目を集めている。

この作品は、難民申請が不認定となったために日常生活が激変してしまった、在日クルド人の少女とその家族をめぐる社会派のドラマだ。銃を持ったクルド人少女の写真を見たことが、制作のきっかけだという。監督自身も英国と日本にルーツを持ち、国籍をめぐる問題に関心があるという。

講演の開口一番、「邦画で外国人が主人公となっている作品がありますか」との問い。全く思い浮かばない。日本映画やドラマに対して、あまりにも無自覚な点に気が付かされた。本作も、この発言が示すようにささじだが、しかし日本に住んでいると気づきにくい、日常のなかの「壁」を描く。

例えば主人公の少女が働くコンビニのお客さんは、「日本語がお上手ね」と笑顔で声をかける。外国人に見える彼女に、悪意なくやさしさから声をかけたのだろう。しかし懸命に日本人として生活しようとする主人公にとって、それは社会との距離を感じる言葉だ。微妙だが、互いに気づげないすれ違いが映画の随所で描かれる。

この作品が、もしドキュメンタリーであれば、明確に難民問題や入管難民法の問題を打ち出し、解決策を論じたかもしれない。しかし本作はフィクションの物語として、そうした大きな問題の手前にある、人々の悩みやシレンマも丁寧に描き出す。

こうしたフィクションの映画や文学などの物語は、何気ない、しかし日々の難問にじっくりと向き合い、人々の日常生活の「ケア」をする。今回の講演もまた、そうした「ケア」の一環であった。

しかし近年、このような「文学的なるもの」の評判は芳しくない。数年前は人文系学部の不要論も叫ばれた。だが、それらが顧みられなくなったら、社会はどうなるのか。今、私たちは、その入り口に立っている。

(静岡文化芸術大教授)

2024年2月18日

中日新聞(朝刊) p.5